

編集委員長 田畑 則一*

Norikazu TABATA*

「レーザー研究」が今月号から装いを刷新したのを機会に、レーザー学会誌としての「レーザー研究」が今後どうあるべきか、出版方法がどうあるべきかを考えてみたい。

「レーザー研究」の内容は、レーザー学会が学界と産業界との協力の基で、レーザー科学の進展と産業の発展を目指しているのに呼応して、学会論文誌の役割と技術解説誌、技術啓蒙誌の役割の両方を担ったものになっている。両方の役割を担っているといっても、本来分冊されているべきものが単に一緒に掲載されていると言うのではなく、出来るだけ両者の関連づけが図られている。新しい表紙に象徴されているように、学会からの情報の輪と産業界からの情報の輪が融合されて、新しい価値を持った情報になるのが期待されている。この形態は堅持すべきものとおもう。

次に情報メディアの問題として、「レーザー研究」がいつまでも現在の印刷物の形態でよいのであろうかと言う議論がある。小生は、学会誌は論文を読む、解説記事を読むと言う観点からは、今の紙への印刷が最適であると思う。将来、紙のように薄くて軽く、紙のように白いディスプレイが出来れば別であるが、現状では見慣れた印刷物に勝るものはないであろう。しかしながら、論文や記事を情報データとして蓄積保存したり、それを検索し、入手すると言う観点から考えると、「レーザー研究」もデータベース化の容易なデジタルデータの形態でも残していく必要がある。マルチメディア時代への対応が必要である。

さて本題とも言うべきDTP(Desk Top Publishing)であるが、出版業界ではDTPにより出版に革命ともいわれる変化が起こっているのはご存知であろう。パーソナルコンピュータと編集業務用の応用ソフトウェアの発達により、出版の編集業務が机上のパーソナルコンピュータ上で行なえるようになり、編集の合理化、したがって出版の合理化が可能になってくる。編集と印刷の過程が入り込むことなく完全に分離出来るようになり、編集過程ではDTPシステムを使って組版データが完成され、それがMO(磁気光)ディスクで印刷過程に送られ、電子製版機で自動的に印刷用のフィルムが作られる事になる。

昨年よりレーザー学会の事務局にDTPシステムが設置され、「レーザー研究」も広告等の一部を除いた本体部分がDTP編集されているのをご存知であろうか。レーザー学会も遅れ馳せながら出版革命の波に乗って行こうと言う事である。

現在、寄稿される原稿はワープロソフトを使って書かれるのが大部分であり、図表も図表ソフトで作られたものが多い。それらのデータを指定されたファイル形式でFD(フロッピーディスク)に記録し、原稿と一緒に事務局に提出してもらっている。事務局ではDTPシステムの頁組ソフトや画像処理ソフト等を使って頁組を行い、著者校正もこの段階で行なって組版データを完成させている。事務局のデスクが編集所になっている事になる。このシステムの採用により、大幅な出版の合理化、すなわち出版の質の向上、納期の短縮、経費の節減が達成された。またMOディスクにデータが蓄積保存されるようになった。DTPの効果は絶大であると言える。

しかしDTP化を計画した最初の段階の目標は、著者の原稿がそのまま組版データになり、校正の不要な編集による出版であった。残念ながら現状は、特定のワープロソフト、特定の図表ソフトで作成された原稿だけが著者校正の不要な状態に維持されているだけである。最近のワープロソフトはどれでも図表の挿入ができ、頁組みが可能であるから、著者が頁組みした原稿のデータをそのまま事務局のDTPシステムで文字フォント等を統一して組版データに出来れば、校正は不要になり、更に工程の合理化になる。DTPのデスクを事務局のデスクから著者のデスクに分散して、著者にも編集を分担してもらう事になる。これが学会誌の理想的なDTPではないだろうか。この方向に向かって更に改革を進めたいのでご協力をお願いする。

* 三菱電機(株) 先端技術総合研究所 (〒661 尼崎市塚口本町 8-1-1)

* Advanced Technology R&D Center MITSUBISHI ELECTRIC CORPORATION, 8-1-1, Tsukaguchi-Honmachi, Amagasaki Hyogo 661